
満ちていく

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満ちていく

【Nコード】

N9147E

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

「彼女は人間が嫌いだった」他人に距離を置こうとする彼女。そして、彼。その関係がねじれた時。それが彼と彼女の道が別れる瞬間だった。青春短編小説。

すっかり慣れ親しんだ教室で、その男子生徒は、窓に腰を乗せて、煙草を吸っていた。顔を窓の外へと向け、何か考え事をしているような様子で、その顔は無表情、その目はどこか鈍く黒ずんでいた。

隣の窓に、女子生徒が、男子生徒と身体を向き合わせるようにして座っている。華奢な肩を丸めており、短いスカートからは細いすらりとした足を宙に浮かせ、前へ伸ばしている。

男子生徒は、視線を窓の外へ向けたまま、煙草を左指で掴んで口から離し、外へと投げ捨てた。

女子生徒がそれを見て、眉をしかめる。

「やめなよ」

女子生徒の言葉に、男子生徒は彼女を一瞬見てから、目を落とし、「ごめん」

と言いながら、窓から立ち上がった。

「どこ行くのよ」

「今日はもう帰る」

男子生徒は制服のズボンの上に垂れ下がったワイシャツの裾の中へ両手を滑り込ませる。そして、ポケットに手を入れて歩き出した。女子生徒は、眉を険しく寄せたまま、窓から立ち上がった。しかし、男子生徒がそのまま振り向かず教室を出て行くと、再び座り直した。

彼女は上履きを履かず、白い靴下の先をぶらぶらと宙で上下に揺らせた。

上履きは、彼女の足下で、無造作に床に放り出されていた。

彼女は顔を脇へと向け、薄暗い教室の黒板へと何とはなしに視線を据えながら、流行りの歌を口ずさんだ。

「照りつける青の残光」

「身に受ける赤い飛沫」

高い小さな声を、緩やかな強弱をつけて、生暖かな空気に響かせる。彼女はじつとそのまま歌っていた。

しばらくして、その教室に、背の小さな女子生徒が、前のドアから駆け入ってきた。

「何やってるの？　今、バンドの演奏が始まるところだよ」

小柄な女子生徒は、入ってきたドアに一番近い、最前列の席に近寄る。そして、机の上にあった鞆から何かを取り出しながら顔を上げた。彼女は窓際の女子へと、口元に笑みを浮かばせつつ言った。

「知ってる」

窓際の女子生徒は歌うのを止め、床に視線を落としながら、無機質な声で反応した。

「三津美ちゃんも、一緒に行かない？」

ドアの前で振り向き、立ち止まる女子生徒。三津美は、女子生徒の手に、黄色いストラップ付きの、デニム生地財布があるのを見ながら、「行かない」とつぶやき、視線を床に落とした。

「そう」

そう言っ、女子生徒は、三津美の伏せた顔を少し見つめた後に、前を向いて廊下へ消えていった。

三津美は、再び歌を囁き始め、顔を窓の外へと向けた。そして、左手を窓の枠へとかけ、少し上体を持ち上げて、顔を窓の枠から上に来るようにした。そうして外を覗き込んだ。

視線の斜め下に、夕陽の照りつける体育館がある。そこから、教室の開いた窓を突き抜けて、マイクで拡大された男子生徒の声が聞こえてきた。

「さあ、お待ちかねの、三谷サザンの演奏が始まります！　皆さん、準備は良いですか！」

生徒の、語尾を長く伸ばして訊く声に、体育館に「良いです」と溢れんばかりの生徒達の叫び声が響き渡る。それは真夏の熱い風を伝って、三津美の耳に心地良く響いた。

彼女は、その無数に固まった声が耳に入ってくると、目を閉じて、長い睫を伏せた。そして、静かに微笑んだ。

三日にわたる文化祭は、今日で幕を閉じる。そして、この夕陽が顔を見せると同時に、学園祭を締めくくる為の後夜祭が、生徒の熱狂にはやし立てられつつ、開始されたのだった。三津美は、文化祭が嫌いだ。各種の準備は手間がかかるし、それに伴うクラスメイトとの会話のやりとり、そして、彼らが漂わせるいかにも明るく、楽しいげな空気を肌に感じると、三津美は、何故だか無性に腹立たしくなつて耐えられなくなり、教室を飛び出すのだった。

自分が素直ではないとわかつていても、彼女は頑なに、他人との交流を拒否し続けた。それはきつと、昔彼女が他者との交流の上で味わつた、やるせなさ、いらだち、怒り、それらが彼女の心深くまで楽しいげな思い出を抉り取り、代わりに彼女の心の隙間を埋め尽くし、心それ自体を形作ってしまったからであろう。しかし、そうした負の感情は、時の流れと共に、風化し、彼女にとって些細なものになった。けれど、表面は風化しても、その奥底で流れる感情だけは、空気に晒され、癒されることはなかった。

彼女は、人が嫌いだった。一部の人間を除いては。

「三津美」

校舎を出て、門へと向かう途中、体育館の裏側の駐輪場で、男子生徒に声をかけられ、三津美は自転車の前で屈まっていた背を伸ばして、立った。

三津美は、男子生徒に顔を向けると、唇の端を少し吊り上げた。対する男子生徒も、同様の笑いを口に張り付かせていた。

「一緒に帰るか？」

男子生徒は長身で、その大きな右肩まで右手を引き上げ、肩から背中へと鞆を吊り下げながら、そう言つて笑つた。

三津美は、唇を不敵に笑わせたまま、誰がお前と、と蔑むような低い声を上げる。

「残念だな、それは」

そう言つて、男子生徒は、三津美の前までやってきて見下ろし、駐輪場に沿つて張られた網柵に右手を引つ掛け、三津美の頭の上で、上体を屈ませた。顔が近くなる。

「んだよ」

三津美はそう言つて、ロングストレートの茶色の髪を、強い風になくなくかかせながら、その髪を両手で掴み、男に触れさせないようにと身体へと引き寄せた。そして、唇を引き結び、上目遣いに睨みつける。

「お前の身体、良さそうじゃん？ だから、一緒に帰る？ ……なんて冗談だけだな」

男子生徒は、ふつと笑い声を零して、三津美から身を引き、じつと髪を抱えて、身体を両腕で抱きしめるようにして立ちすくむ彼女の横で、自分の自転車の鍵を解いて乗り、さつさと駐輪場を横切つて、消えていってしまった。

三津美は、ゲテモノ、と男子生徒が去つていった方を見つめながら呟き、自分の自転車を右足で一蹴りした。

しかし、すぐに手を髪から離すと、艶やかな長い髪は、再びさらりと彼女の両腕の隙間へと流れ込んだ。彼女は赤い自転車のサドルに、細い腰を乗せると、馬鹿野郎が！ と、駐輪場に響き渡るような大きな罵声を上げ、険しい顔つきのまま、男子生徒が去つた方向へ睨んだ目を向けた。そして、その方向へと、自転車のペダルを強く蹴った。

風は、汗でむせ返りそうな、服の内をすり抜けて、涼しかった。彼女は、右手でハンドルを握りながら、左手をそれから離し、ワイシャツの襟のボタンを一つ外した。彼女の胸のラインが、少し露出したが、彼女は周囲に誰もいないのを確認すると、笑顔を浮べて、平然と校舎の横を迂回した。

再び、歌を歌い出した。

「照りつける青の残光」

「身に受ける赤い飛沫」

「肌を滑る白い汗」

「私はあなたが嫌い」

彼女は、笑みを口元に浮べたまま、前方を見た。そして、徐々に緩んだ口元が、下がっていった。

彼女は、歌を歌うのをやめた。彼女は、両手にブレーキレバーを握り締め、自転車を急停止させた。

彼女の前方に、ワックスで無造作に散開させた金色の長い髪を、淡い日差しに照らせた長身の男子生徒が居た。

彼女は彼の顔を見て、少し微笑んだ。彼も、肩から背中にポストンバックを垂らしながら、よお、と彼女へ微笑んだ。どこか優しい笑みだった。

金色の後頭部が、照り輝く様を、三津美はじつと見つめていた。背中に胸を乗せて、抱きつくように彼の皺くちやのワイシャツの背中に寄り添い、腕は、太くて固いその胸の周りに回されて、しっかりとそれを掴んでいた。

彼女は、自転車の後部タイヤの上の、泥除けの真上に立ち、両足は、車体を立てるために後部に取り付けられたスタンドの、左右の付け根に乗せ、彼女は前かがみになって、二人乗りの後部の位置を占めていた。

サドルに腰を乗せた、男子生徒は、自転車を漕ぎながら、時折顔を横へ振り向け、後ろの彼女を見やった。

三津美は、笑顔を返した。男子生徒は少し苦笑いして、正面向き直った。

二人は、学校のグラウンドを囲むネットに近い道路の端を、自転車

で颯爽と走り、反対車線を走る白いワゴンカーが横切ると、勢い良く風が舞って、二人の髪を掠め、頭の右端を逆立てた。

「今日は、どこ行くの？」

「どこ行くかな」

三津美が耳元で囁くと、男子生徒は少し身体を震わせ、その後すぐに言葉を返した。彼女の声は掠れていて、少し色っぽく感じた。

男子生徒は、鈴木春夫と言った。三津美と知り合い、付き合っ

て恋人のような、密接な間柄になって数年になる。

彼らは、最初の頃こそ長い間に一緒に居る事が多かったが、最近は、たまたま会った時や、お互いに暇な時など、気が向いた時にしか会うことはなかった。しかし、それでも、彼らにとって、十分だった。そのわずかな時間だけで、満足していた。

元より、人と付き合うことをあまり好まない二人だったから、たとえそれが恋人であったとしても、自分の習癖は変わらなかった。

彼らは、お互いの悩みを具体的には知らない。しかし、胸に響く、言葉にならないような感情によって、お互いの事情をほぼ理解し尽くしていた。彼らは、互いに人が嫌いだ。けれど、例外的なものとして、お互いの存在があった。その関係が、今、切れようとしていた。

三津美は微笑を浮べたまま、頬を、春夫の背中にこすり付けた。

そして、目を閉じて、じっと何かを考えた後、頬を離し、真正面にある彼の後頭部を見て、一言、「停めて」と言った。

彼は、すぐに道路から横の歩道に移り、タイヤを停止させた。

「別れましょう、ここで」

彼女はそう言って、両手で彼の背中を押し、後ろへ飛び降りた。

着地すると、少し後ろによるけ、慌てて彼女はバランスを取った。彼は、前を向いたまま、大丈夫か？ と彼女に言った。彼女は苦笑して、大丈夫、と返した。

「この一年の間、お前が俺の心を支えてくれた。お前は俺の命を繋ぎとめていてくれた」

「それは私も同じ」

「別れるってことが、俺にとって、何を意味するのか、わかってるのか？」

「わかってる。わかってての決断よ、これは」

「そうか」

彼は悲しげな顔を浮かべ、そして、目から涙を溢れさせて、顔を伏せた。

彼女は、見ないようにして、彼から顔を背けた。

「また会いましょう。その時は、もう、ただの同級生。知り合い。嫌いな人。……じゃあね」

彼女が歩き出そうとすると、背後から、待つてくれ、と震える春夫の声が聞こえてきた。しかし、彼女は止まらなかった。

昔、彼女は男に酷い目に遭わされた。それが、学校中に広まった

ある時、突然。

その時、彼女は目を塞いだ。しかし、瞼を突き抜けて、周囲の悪意ある視線は彼女をめった刺しにした。彼女はその時から、心をぼろぼろに、身体に震えを絶えず背負ったまま、生きる事となったが、彼女は自ら周囲との関係を断ち切ることで、生き延びることに成功した。

彼女の棘のある、周囲への対応は、周囲の悪意を沈黙させ、逆に彼らは、彼女を、自分達へ悪意を向けてくる人間として恐れるようになった。そうして、彼女と周囲との間に築かれた垣根は、時間と共に遥か高くへと上りつめた。しかし、その上昇を防いでくれたのが、春夫だった。

春夫との出会いは、全くの偶然、しかしもしかしたら、運命と言えるのではないか、と思った。

彼女は自殺しようとした。ビルの屋上から転落。しかし、真下に居た、大柄な男子生徒がそれをキャッチし、その反動で、彼は体勢を崩し、地面に倒れこんだ。

そして、彼女と彼は、倒れたまま、お互いの目をむき合わせた。

視線がぶつかり合ったその数秒間に、彼女と彼は、確かに、言葉なき会話をした。

三津美と春夫は、お互いに病院で検査を受けた後、駆けつけた二組の夫婦　両親を退けて、一室に鍵を掛けて籠もり、話に熱中した。

彼女と彼は、お互いに、同じような心の傷を負っていた。それを舐めあい、しかし、久しく忘れていた、他人へ心を開くという喜びに、再び胸を湧き立たせることになった。

彼女達は、一時期、結婚の約束を誓い合うまでになったが、今となっては、それはあくまでも思春期のロマンティックな思い出しに留まるに過ぎなくなった。

別れる理由は唯一つ。彼女は、彼との触れ合いで、自らの心を守る為に立てた垣根をすり減らしていき、頭の上にあったそれは、もう腰の下まで来ていた。

傷の舐めあいはもう終わり。それをするのに、彼女はもう飽き飽きした。人は嫌いだけど、傷の舐めあいも嫌いになった。結局、心のよりどころとしていた物までを嫌ってしまっただけなのかもしれないけれど、それでも、どうしてこう、心が晴れ晴れとしているのか、彼女はそんなことを疑問に思いながら、歩道を反れて、鬱蒼とした住宅街へ、涙に濡れた顔を振り向けた。

最後に、「おい、待って」と、掠れた弱弱しい声が背後から聞こえたが、彼女はやはり、立ち止まることはなかった。

彼女には、もう一人、心を許せる人間が居た。その彼はいつも、人に無関心で、しかし、人の話を聞いていないようで聞いているという、不思議な人間だった。一度、彼女は、あまりに反応のそっけない彼に、聞いているの？と、問い質してみたことがあった。彼は、聞いていない、と答えたが、実際は聞いていることが、彼の話

す内容から掴めた。

彼女は、浮世離れたこの同級生に好感を持ち、付かず離れずの距離をもって、彼に近づいた。

彼は、彼女が近づいてきても、嫌がらなかった。来るもの拒まず、去るもの追わず。そんな感じ。

三津美は、駅前の本屋で、彼と遭遇した。今日で二回目だ。

「まだ、家に帰ってなかったのね」

三津美は、右耳にかかった長い髪を払いのけながら、スポーツ雑誌を読み漁っている彼に近づいた。

彼は雑誌から、少し顔を上げて、彼女を見やると、すぐに視線を雑誌の写真へと戻した。

「マイケル」

三津美は、彼の背後から雑誌を覗き込み、そこにアップで映っている選手の名前をつぶやいた。

彼は、横目で、三津美の顔を見た後、雑誌に目を向けてしばらく読み、そしてページをめくった。

三津美は、彼の横に立ち、別の雑誌を手にとったが、ぱらぱらとめくっただけで、すぐに戻して、彼の方へ向いた。

「これから、一緒にご飯食べない？」

「食べない」

彼はそう言っつて、少し口元に微笑を浮べて、雑誌を閉じると、それを置いた。

そして、三津美に背を向けて、書店の入り口の方へと足を向けた。「待つてよ、たまには良いじゃない」

早足で彼の後を追う三津美は、ワイシャツの長袖を肘のところでもくっていたが、腕を振って小走りに彼の背中を追う途中に、それが肘から下へ垂れた。

三津美は、追いつくと、彼の背中を鞆で叩いて、立ち止まらせた。「何だよ」

少し眉を寄せて、うっとうしげに言う彼の顔を、笑顔でじっと見

ながら、三津美は立ち止まった。

「あたし、別れたんだ。今日」

そう告げると、彼はわずかに驚いた顔で振り向き、

「お前、それが何を意味するのか、わかってるのか？」

と、ひどく真剣な目を三津美の端整な顔へと据えた。三津美は、彼に見つめられながら、目を伏せ、足元を見た。

「わかってる」

一言、小さくつぶやくと、彼は、そうか、と無機質な声で言って、背を向けた。

「お前が決めたんだからな。これから何が起ころうと、それはお前の責任だ」

そう忠告するように言うと、彼は、金髪の長髪をかき上げ、細い腕をエスカレーターの手すりに乗せ、階下へと降りた。

三津美は、立ち尽くしたまま、ずっと構内の白く艶やかに照る地面を見つめていた。

吉田。そう書かれたプレートの前に、彼女は立っていた。顔を上げると、二階の窓には明りは見えず、一階も同様で、敷地の広い一軒家には、どこか寂しげな重い空気が降りていた。

三津美は、門前で、側面の白いその家の壁に、月の光が差して青白くなっているのを、空虚な物憂げな目でしばらくじっと見つめていた。

しかし突然背を向けて、足を道の先へ踏み出し掛けた。けれど、足を止めて再び家の方へ振り返り、そして門に近づいて、鉄格子の門扉を開いた。

小さな低い階段を二三段上がり、赤いタイルの地面に立つと、鉄の重苦しい扉の鍵穴に、スカートのポケットから取り出した、イルカのキーホルダーの付いた鍵を差込み、ゆっくりと捻って開けた。

中に入ると、真つ暗だった。壁に手を伸ばして手探りでスイッチを探し当てると、押した。

玄関から一直線に続く長い廊下の、白い天井に埋め込まれた丸い電球が、淡い光を廊下の艶やかな床板に反射させた。

三津美は、ローファーを荒っぽく脱ぎ捨て、白い靴下で、廊下のわずかに軋む床を、足早に歩き、リビングに続くドアと玄関の中間にあつた階段へと、足を乗せた。

二階へ上がり、そのまま廊下の奥の、木製のドアのノブを握り、部屋に入ると、音を立てて勢い良く閉めた。

部屋の中は、窓から差す青白い光の一色に染め上げられていた。

彼女は、青っぽく見えるベッドの白いシーツの上に、腰を乗せた。両足が、部屋のカーペットから離れ、宙を浮く。

腿の上に両手を乗せて、そのまま、静かに座り、ベッドの寄せられた壁とは向かいの壁に、密着しているプラズマテレビの暗いディスプレイへと視線を据えた。

そこに映っている顔は白く、大きな目が、光を反射させて、照り輝いているように見える。形の良い唇は、笑みを消して引き結ばれ、華奢な肩から両腕が、力なく腿の上へと垂れている。

彼女は、膝の後ろをベッドの端に寄せたまま、立ち上がり、スカートを脱いだ。ワイシャツ一枚と下着だけの格好で、彼女はベッドに入り、壁の方を向いて目を閉じた。そして、

「じゃあね、春夫」

とつぶやき、目元から感じる熱さを堪えるように目を強く瞑り、そのまま眠りについた。

翌朝、学校に行くと、なにやらクラスの中は騒がしかった。近くの女子に訊いてみると、彼女は恐る恐ると言った様子で、三津美を向き、敬語で、

「昨日、うちの男子生徒が自殺したらしいんです」

と、言って、内容を伝え終わった途端に逃げるように他の女子の集団の方へ駆けて行った。

三津美は、逃げ去った彼女の背中を呆然と見詰め、途方に暮れたような表情を顔に浮かばせたまま、自分の席についた。最後列の中央の席だった。

三津美は、椅子に座ったきり、正面を向いたまま、身動きせずにかの抜けた人形のように黙っていたが、突然、両手で頬を掴んだ。「春夫」

とつぶやき、そして、顔を伏せた。しかし、数秒の後、彼女の背中が、ぽん、と軽く叩かれ、三津美はゆっくりと後ろへ振り向いた。「やっぱり、死んだな。あいつ」

男子生徒は、自分の金色の髪を指でいじりながら、三津美の背後に立ち、視線を窓の方へと向けて思案げに言った。

三津美は、彼を見ると、視線を伏せ、そうみたいね、とつぶやいた。

「どうするんだ、お前？ あいつを追って死ぬなんて言い出すか？」

三津美は、ふ、と青白い唇から息を零し、力ない笑みを浮べて、「まさか。死ぬわけないじゃないの」と言って、再び机の上に細い両腕を伸ばして、その間に顎を置いて、正面を見つめた。

「ま、死ぬも生きるも、個人の自由だ」

そう軽快に言って、男子生徒は、三津美の背を見下ろした。その顔が、突然無表情になり、

「だが、俺はどうも、お前を許せる気がしない。お前は何も悪くないとはわかってはいるけど、それでも許せない」

三津美は、そう、別に良いわ、と前を向きつつ言った。

「今から、あいつの家に行って、死体を掻っ攫って来る。あいつの死体には、これ以上誰にも触れさせないよ。本人の意思通り、山に埋める」

「勝手にしなさいよ」

「お前は、最低の下種野郎だ」

「何とでも言いなさい」

これまで聞いた事のないような、彼の哀しみに震えた声に、三津美は、平然と言葉を返した。

「私は、私の道を選んだ。春夫は彼自身の道を進んでいったの。どちらも、咎められることなんてないのよ」

三津美はそう言って、もう一度振り向いたが、そこにはもう、彼の姿はなかった。

いつか、三人で、海に行った事があった。春夫は、子供のようにはしゃいで、元気な大声を上げて、海岸沿いの道を、今私の元を去った彼の背中を押しながら走り、私はその後ろを、子供を見守る母親のような、母性溢れる視線でもって、見つめていた。私の目には、二人の笑顔は、とても輝いて見えた。

もう、あの頃のような、おだやかな時間を送ることはできないかもしれないけれど、それでも今、こんなにも清々しい気持ちで、胸に満ちていくのを感じている。涙は止まらないけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9147e/>

満ちていく

2011年10月5日02時52分発行